SOWER

ソア＝種まく人
No.50
November 2022
一般財団法人
日本聖書協会

特集 みことばの種をまく
ソア30年の歩み

50号
記念

新聖書の世界 49

写真／文 横山匡

ソレクの谷のサムソン

「イスラエルの人々は再び主の目に悪とされることを行った。主は彼らを四十年間、ペリシテ人の手に渡された。」（士師一三・一）その頃、サムソンは、ソレクの谷を見下ろすツォルアで生まれました。

「ペリシテ人の時代に、サムソンは二十年間イスラエルを治めた。」（一五・二〇）サムソンの活躍した場所は、ほとんどがソレクの谷が中心でした。

エルサレムの西二〇キロにソレクの谷に沿って標高三五〇メートルの石灰岩の丘陵地帯があります。採石場として利用されていました。一九六八年三月の発破で偶然大きな鍾乳洞が発見され、直ちに国立公園局の調査が入りました。数千年もの時間をかけてできた見事な鍾乳洞であることがわかりました。一九七五年に国立公園として公開され、人気の観光地になりました。小グループごとにガイドが付き、案内してくれます。石筍が一年間に伸びるのは、わずか〇・二ミリ。ソレク鍾乳洞はサムソンの時代、すでに地下に存在していたのです。

デリラに欺かれたサムソンは、ガザのペリシテの神ダゴン神殿に曳きだされ、屋根を支える二本の柱を倒して三千人のペリシテ人を殺し、自らも死にます。

石筍はダゴン神殿の柱を連想させます。

The World of the Bible “Samson in the Valley of Sorek” / Photo & Essay by Yokoyama Tadashi

CONTENTS

SOWER No. 50 2022

2 特集
みことばの種をまく
ソア30年の歩み

巻頭対談
1. 川平朝清×具志堅 聖
2. 大宮 溥×石田 学

10 インタビュー
横山 匡
鈴木範久

12 人物と聖書㉟ 鈴木範久
武者小路実篤と聖書

14 エッセー㊻ 星野宏美
「聞け、イスラエルよ、主の声を聞け」
メンデルスゾーン作曲《エリヤ》の歌詞とその聖書出典

16 聖書セミナー㉔ 浅野淳博
聖書が語るイエスの死の意味

18 JBS情報

20 ソア50号発行によせて
編集後記

21 新・歴史接写❶
聖書頒布の時を刻んだ木箱

表紙の言葉
今回は横浜の指路教会です。「指路（シロ）」とは「平和を来たす者」という旧約聖書におけるメシアを表す意味や地名のことで、その設立は安政6年まで遡ります。
震災・空襲などの苦難を乗り越えつつ、伝統と「今」をつなぐかのように、現代的な街の一角に佇む姿が印象的です。（絵・文＝佐藤百合子）

巻頭聖句

主は女の手にシセラを
売り渡されるからです。
（士師記4章9節　聖書協会共同訳）

カナンの都市ハツォルの抑圧にイスラエルの民があえいでいた士師時代のはじめのことです。民が神に叫び訴えますと、女預言者デボラは戦士バラクを呼び、彼を鼓舞してハツォルと戦わせました。しかし、敵の将軍シセラを討ち取る栄誉はバラクではなく女の手に渡される、と主は告げます。バラクはハツォル軍を撃破しますが、逃れる将軍シセラを天幕に休ませ、討ち取ったのはヤエルという一人の女性でした。男たちの戦いはデボラとヤエル、二人の女性によって決着するのです。戦いにおける勝利は軍事力によらない、という旧約聖書を一貫する洞察が、二人の女性をとおしてここに物語られているといえましょう。

月本昭男
つきもと あきお
立教大学名誉教授、上智大学名誉教授、古代オリエント博物館館長

特集 SOWER30年の歩み

みことばの種をまく

日本聖書協会理事として二〇年以上を務めたお二人に半生を語っていただいた。川平朝清氏は同じく沖縄にルーツを持つ総主事具志堅 聖が、前理事長の大宮 溥氏は現理事長の石田 学が聞き手を務めた。

川平 朝清
昭和女子大学名誉教授・日本聖書協会名誉理事

×

聞き手 具志堅 聖 日本聖書協会総主事

巻頭対談①

具志堅 台湾生まれ、台湾育ちだそうですね。

川平 家族は大正末期から昭和初期までは、台中におりました。日本人は植民地の台湾の人たちを一歩下に見るところがありましたが、家族は、台湾の人たちと接するときに穏やかで、こうあらねばと思いました。

具志堅 キリスト教との接点についてお伺いできますか。

川平 一番上の兄の朝申が、記者をしていた当時、聖公会の信者だった上司の方が亡くなられたのです。葬儀のとき牧師の語る言葉に打たれ、そこで導かれ信者になり、三人の兄も洗礼を受けました。母も熱心に教会に通い、幼い私も母に連れられて行きました。母は私と一緒に戦後の一九五〇年、沖縄の聖公会で洗礼を受けました。

具志堅 お父様が台湾で召されて、戦後家族で沖縄に戻って来られたのですね。

川平 沖縄に来たのは一九四六年でしたが、与那原から首里まで歩きました。道はぬかるんで、戦車の残骸や、鉄兜、兵士の軍靴などがあって、その軍靴の中になんと足の骨が残っていたのです。山野にも多く遺骨が残され、見かけてもどうにもしようがなく、申し訳ない思いでした。

具志堅 沖縄戦のことを身近にお聞きになられたでしょうか。

川平 生き延びた私の叔父や叔母たちからも戦争の話は身近に聞いてきました。アメリカ留学の後、アメリカ人の家内と結婚して、首里に落ち着きました。その時に、日本キリスト教団首里教会牧師の仲里朝章先生が副牧師として迎えたのが金城重明先生です。慶良間での集団自決で、母親を自分の手にかけたという、苦しい経験をされた方でした。

具志堅 その後、放送業界のほうの立ち上げをされ、後のＮＨＫにも繋がっていくのですね。

川平　実は台湾放送協会が開局した一九二八（昭和三）年、ラジオ新聞の編集長の、朝申が昵懇だった逓信関係の官僚の方から頼まれて、それがラジオと関わるきっかけでした。内地（日本本土）の放送を中継するということでした。その経験は戦後沖縄で生かされています。特に島の多い沖縄では、ラジオが娯楽やニュースに最良と考えたのです。ただ、沖縄の政府には取り合ってもらえず、アメリカ軍政府を訪ねると、経験者や技術者はいるかと言われました。沖縄放送局の生き残りの優秀な技術者たちがいて、具志川村に、民家を改造して放送局を立ち上げたのです。

具志堅　アメリカの援助による形ですか。

川平　いえ、アメリカ軍政府主体で、アメリカの資金でつくられたのです。親子ラジオと一般的に言っていた「グループリスニングシステム」という、いわゆる日本では農村ラジオという有線ラジオがあったわけですね。村長さんとか区長さんとか各所に、発電機と受信機と増幅器を置き、各家庭にスピーカーを置いて放送を聞けるようにしたのです。これがお金になるということで、有線ラジオ会社もどんどんできてリスナーが増えていきました。

具志堅　放送に関わるさまざまな働きをなさってきたと伺っています。どういう思いで始められたのでしょうか。

川平　元々私は旧制高校では医者になるためのコースをとっていたのです。ですが沖縄の人たちが本当にラジオを聞いてくれるので、アナウンサーも悪くないと思いました。その後、留学を経て商業放送に、後は公共放送に関わるのです。

具志堅　ご子息が、ラジオのお仕事を受け継がれていますね。

川平　したいようにしなさいという、家内ともそういう方針でした。結果、子どもたちはみな洗礼を受けてクリスチャンになりました。いつも子どもたちに言っていたことは、常にフェアであれということです。これは両親から受け継いだものと思っています。長男（ジョン・カビラ［川平慈温］）がラジオに関わると聞いたときは、嬉しい半面、少し不安があったのです。けれど、それぞれに自力で開拓していってくれました。いい息子たちを持ったと思っています。

具志堅　聖書を読み始めたきっかけを教えていただけますか。

川平　戦後に聖公会の宣教師のお二人が沖縄に来られたのです。そのうち一人はアメリカ海軍で沖縄戦に加わった、ヘフナーさんという方で、もう一人はゴッドフリーさんという方でした。そこで朝申から、通訳をやれと言われたのです。通訳をするには、先生にあらかじめ説教の内容を伺うわけですね。それが大変よい聖書の勉強になりました。そのときに、初めて沖縄で私は聖書を手にしたのです。

アメリカから贈られた
新約聖書

具志堅　文語訳の新約聖書ですね。

川平　そうです。これは、戦後占領軍が持ってきた、アメリカで印刷した聖書ですね。この聖書を元に通訳をしているうちに、初めの頃はいろんな疑いが出てきます。何度も先生に食い下がったのです。ところが先生からは通訳を通してあなたは学んでいるのだ、学び続けなさい、とだけ言われました。

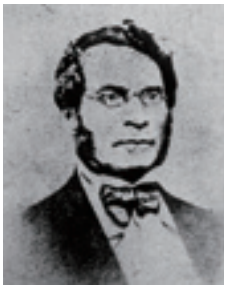
具志堅　日本聖書協会理事には一九八一年から二〇一八年まで三八年間在職されました。

川平　沖縄放送協会会長をしていたときに、アメリカから沖縄にも国際ギデオン協会受け入れの働きかけがあって、竹内羊蔵さんという方が一緒にみえて協力することになりました。一九七二年に私は東京に移ったのですが、一六年後の一九八一年の一二月、聖書協会の副理事長だった竹内さんから、マスコミにいる方が絶対に必要だ、信徒の人にも加わってもらいたい、というお誘いを受け理事に加わりました。

具志堅　在職中の印象深い出来事は何でしょうか。

川平　一九九六年のおきなわ聖書展です。聖書を琉球語に訳した聖公会の宣教師ベッテルハイ

'96 おきなわ
聖書展


バーナード・J・
ベッテルハイム

1981年聖書協会理事
になった頃

ムが来てちょうど一五〇年という記念の年でした。カトリック、プロテスタント両教会の関係者が大歓迎してくれたと同時に、大勢の人たちが会場に来られました。

具志堅　日本国内での聖書協会の働きについて、どのように思われますか。

川平　カナダ、アメリカの聖書協会が先見の明があったと思うのです。銀座のメインストリートに、教文館と聖書協会の建物を遺してくれた。これに尽きますね。寄せられた献金を、すべて聖書頒布のために集中できる。なるべく経営自体を効率化して、いっそう聖書頒布に資金をつぎ込めるように、努力を続けていただきたいです。

具志堅　今後、ますます持続可能な組織、運営が重要になっていくと思います。教会とのつながりの中で、何が求められているか、踏み込んでしていかねばと思っています。

◆

具志堅　愛唱聖句を教えていただけますか。

川平　ローマ書五章二～五節です。「苦難が忍耐を生み、忍耐が品格を、品格が希望を生むことを知っているからです。」以前の新共同訳の練達という言葉はなじみの薄い言葉だと、かねてから思っていたのです。今度の聖書協会共同訳では「品格」となった。わかりやすいので喜んでいます。

具志堅　私の義理の弟は平和主義を掲げるメノナイト・ブレザレンで、亡くなられた奥様もメノナイトご出身と聞き、親近感を覚えました。戦争しない、行かない、関わらない。平和というのはやさしいようでも、一番難しいことではないかと思います。

川平　そうですね。あるとき高等弁務官主催のレセプションの場に、アメリカの習慣として夫婦同伴で行きました。家内は臆せず、高等弁務官のところに行って、沖縄からベトナム爆撃に向かうB52について、沖縄はかつて戦争で被害を受けた、今度の戦争では、爆撃する立場に立ち心を痛めている、と意見を言うのですね。

具志堅　まさにアメリカの民主主義を体現されていますね。

川平　沖縄のときにもメノナイトということで、クエーカーの人たちがよく来られました。それからベトナムの脱走兵、そういう方たちを援護する弁護士がニューヨークから家内を頼って訪ねて来られました。

具志堅　救済活動をなさったのですね。

川平　そうですね。また特に家内は沖縄で無国籍となった子どもなど、養子縁組の国際的な福祉活動、そうした組織の沖縄支部の仕事にも携わりました。そういう子どもたちを、一時家に預かることなどもしています。本当に反戦平和ですね、息子のジョンが番組の最後に必ず"Peace"と読んで番組を終えるのです。家内の影響だったかなと思っています。

具志堅　最後にご長寿の秘訣は何でしょうか。

川平　一つは歩くこと。エスカレーターでなく、階段を使う。最近は息子のジョンから誘われて泳ぐようにしています。二つ目は大きな声で歌うことです。教会の礼拝が、今はZoomになりました。一人、部屋で歌っています。

具志堅　先生は九〇歳を超えているとは思えないはっきりした声をされていますね。

川平　やはり賛美歌のおかげじゃないでしょうか。声だけは歳をとらないなと思っています。

具志堅　二〇二五年、日本聖書協会は一五〇年の節目を迎えます。その機会には先生にもぜひ何かお願いできたらと思います。

川平　そういうのを聞くと、頑張らねばという気持ちになるのです。ぜひその時には呼んでください。

具志堅　本日はありがとうございました。

巻頭対談②

石田　四国のご出身だと伺いました。

大宮　一九三三（昭和八）年、香川県の多度津に生まれました。弘法大師の出生地で、琴平金刀比羅宮の近くです。父が、練炭・炭団製造、燃料業を営んでいましたが、私が小学校に入る前に亡くなりました。兄弟は、貿易商をしていた大阪の親族に引き取られ、末っ子の私は、母一人子一人で、少年時代を過ごしました。住まいは、多度津の町外れにあって、果てにある村の住宅でした。村の小学校に、三〇分かけて通っていました。

石田　軍国主義の最盛期、やがて戦争へと向かう時代ですね。身近な方で、戦争に招集された方もおられるのでしょうか。

大宮　四人兄弟で、兄が二人とも出征しましたが、幸い戦死することなく戦後を迎えました。高松に空襲があって、夜、真っ赤に町が燃える様子や、瀬戸内海の施設が爆撃されるのを眺めた経験もありました。

石田　戦争中は軍国主義教育を受けられたのですね。

大宮　私は軍国主義の特製品のように育てられました。生まれてすぐに戦争があって、戦時教育の中で育っているので、天皇制国家こそが自分本来の環境と思いこんでいました。

石田　終戦の一九四五（昭和二〇）年八月一五日を覚えておられますか。

大宮　昼に天皇陛下の詔勅があるというので、駅のラジオの前にみな集まって座っていました。ですが、雑音が酷くて何を話しておられるのか全然わからないのです。これからソ連とも戦争するのか、そんな噂になっていました。夕方になって、どうも戦争に負けたらしいと。真っ暗な中に放り出されたような感じでした。

石田　戦時中、少年時代から先生はキリスト教に触れておられたのでしょうか。

大宮　元々、四国は徳島県出身の賀川豊彦先生の伝道が大変熱心なところでした。明治には、士族の有志が中心になり教会が建てられる、そんな開けた土地柄でした。私の隣家がクリスチャンホームでした。昭和の初め頃は、私も幼い頃に何回か当時の多度津教会の日曜学校に行ったのです。戦争が始まってからは無理でした。

石田　戦時中から聖書をご覧になっておられましたか。

大宮　マタイ福音書の分冊を一冊教会でもらい、それを読んで戦争が終わるまで過ごしました。

石田　本格的に聖書に触れる、あるいは教会に通われるようになったのは、いつでしょうか。

大宮　終戦は小学校卒業の年でした。戦争が終わり、これからは民主主義社会になる、その基礎としてキリスト教を学ばなければ、と世間一般でもそういう風潮になりました。私は多度津の隣にある丸亀の旧制中学に進みました。南改革派教会の宣教師が伝道してできたのが四国学院です。旧制中学、新制高等学校の時代に学校のバイブルクラスや、宣教師館で聖書を学び、それが自分の主な養いとなりました。

石田　私の叔父も四国学院大学で経済学の教授をしていました。とても親しみを感じます。洗礼を受けられたのは、どこでしょうか。

大宮　多度津の教会でした。戦争が終わって二年ばかりたった頃でした。ふっと日曜日に教会に出てみたくなりました。ちょうど「主我を愛す。主は強ければ、我弱くとも恐れはあらじ」

大宮 溥
日本基督教団隠退教師・日本聖書協会名誉理事

×

聞き手　**石田 学**　日本聖書協会理事長

という、"Jesus loves me, this I know" が会堂から聞こえてきて、なんだか本当に迎えられているという感じがしました。

石田　洗礼を授けたのは日本人の牧師でしたか。

大宮　粟津音松という、広島生まれ関西学院出身の先生でした。この粟津先生の影響が大きく中学に入ってからの図書館は牧師館でした。ここでスコットランドの神学者フォーサイスの『祈祷の精神』に出会いました。これを読んで、祈り、味わいを持って生きるという、何か根のある生活を見出せたような気がして、本当に良き出会いだったと思います。

石田　フォーサイスとの出会いがそんなに若いときだったとは。生涯の研究対象をそのときに見出されたのですね。

◆

石田　その頃に使われた昔の聖書はお持ちじゃないですね。

大宮　戦後で、アメリカ聖書協会の厚意で、ずいぶんたくさんの聖書が日本に届けられました。私は手に入れることはできませんでした。教会に行くとその聖書で学び、貪るように読みましたね。

石田　献身に至った経緯をお聞かせいただけますか。

大宮　高校に入って、ある時、粟津先生から「一度留学をしたい。君が、留守の間教会の御用をしてくれると願ったり叶ったりなんだけどな」と言われました。半分冗談のようでしたが、それが深く響き、牧師になる、これも一つの道なのだと心に刻みました。県立丸亀高校を出てから、粟津先生の奨めに従って、東京神学大学に入りました。桑田秀延、熊野義孝、北森嘉蔵、私はそれらの先生の弟子のようにして育てられました。東神大を一九六六年に卒業して牧師になりました。

石田　最初に赴任された教会はどちらでしたか。

大宮　大村勇先生の元で、阿佐ヶ谷教会で補教師になりました。その後は新潟にある旧日本基督教会の東中通教会でした。東中通教会で一四年間主任を務め、結婚して家内も協力牧師として務めました。その後、大村勇先生が引退をなさるので、阿佐ヶ谷教会に招かれました。

石田　新潟の印象はどうでしたか。

大宮　最初、四国から出てきて東京、そして新潟に行くのは負担に感じていました。でも東中通教会は新潟大学の教育学部がそばにあって、教師が多かったですね。神学的に堅実な教会でした。

石田　新潟におられた時代に、敬和学園の設立に関わられたのでしょうか。

大宮　一九六四年に新潟地震があって会堂と、幼稚園舎が全壊しました。全国からこの災害・震災援助で寄せられた献金で、ひとまず建て直すことができました。ですが、自分たちのためではなく、この地域のために援助を用いることができないかと話し合いました。結果、プロテスタントとカトリックがそれぞれ新潟に学校を建てることになり県と市に働きかけました。北にプロテスタント、南にカトリック校ができました。新潟市の一番北の太夫浜というところに県有地を提供してくれたのです。これはもう千載一遇の好機だと新潟のクリスチャンたちは非常に熱心になって働いて学校ができたのです。

石田　いとも順調なように仰いますが、実際はご苦労が多かったでしょうね。

大宮　高校を作る時に、西村次郎という、日本教育界の古老に相談しました。すると優れた教育者を連れてこなくちゃいけないと。推薦くださったのが、当時日本聖書神学校の教務主任をしておられた太田俊雄先生でした。大村勇先生に相談したら直接出かけていって、熱心に交渉してくれたのです。太田先生を校長に迎えることで教育基盤ができました。太田先生の尽力、そして多くの方々が、新設校に期待を抱いてく

日本基督教団多度津教会旧会堂

ださった。それが今日もなお働いているのだと思います。

石田　一九九二年日本聖書協会の理事に、一九九六年に理事長になられましたが、その経緯を伺えますか。

大宮　先代の理事長は、救世軍司令官吉田信一先生でした。既にだいぶお年を召され、臨時の責任を取られたということでした。いずれは教会の牧師にバトンを渡すのが妥当だろうということで、私が引き受けることになりました。

石田　在任の二四年間を通してどのようなご感想をお持ちですか。

大宮　聖書協会世界連盟は四つの地域、日本を含めたアジア・太平洋地域から中国、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカに分かれていますが、それぞれが独特の使命を覚えて、協力を重ねることができました。頻繁に外国聖書協会との交流に携わり、いろいろな企画を取り入れました。これによって大きな実りをもたらせた時代だったと思っています。

石田　二〇〇九年から新翻訳事業が始まり、先生は最初から最後まで携わられました。

大宮　聖書翻訳は聖書協会にとってはとても大切な働きです。人選、翻訳の成果を検討していくことにおいて、翻訳委員も、事務局も皆さん大変熱心にやっていただきました。

石田　『聖書　聖書協会共同訳』完成は先生の理事長として最大の働きであったと思います。私も含めて日本のキリスト教界全体が先生に感謝しなければと思っております。

◆

石田　愛唱聖句をお伺いできますか。

大宮　「キリストの愛がわたしたちを駆り立てているのです。」という、第二コリント五章一四節の言葉です。聖書を通じて、愛のむち打ちと言いましょうか。そういうものを感じています。

石田　私も跡を継いで励んでまいりたいと思います。私を含めた後進へのメッセージをいただけますか。

大宮　教会、団体、学校が連帯し、強められていくためには、実際に聖書を用い、聖書の提供そのものを通じて、それが果たされることが必要だと思います。私は、不十分な働きでしたけれども、石田先生と事務局が協力し合って、具体的な聖書頒布のための取り組みをさらに強めて、今後の働きを進めていただけたらと願っています。

石田　伝統の違い、また神学的な立場の違いを超えて、そういう教会や団体を一つに結ぶことのできる、その働きが日本聖書協会に委ねられていると思います。大きな貢献をなさってくださったことを心から感謝いたします。

◆

石田　これからの時代を担う人たちに伝えたいメッセージをお願いします。

大宮　いささかマンネリズムに陥ってはいないでしょうか。いろいろな企画・集会を通じて、聖書を読むチャンスを多くつくってほしいです。生きた聖書の言葉を、教会の中に満たしていただきたいと願っています。

石田　「聖書協会共同訳」がそのようにして広く用いられると、本当に嬉しいですね。さて、二〇二五年、日本聖書協会は一五〇年を迎えます。どのような働きを期待しておられますか。

大宮　キリスト教界はメディアにしても厳しい状況にあって、聖書についてのホットニュースが流れにくい状況があると思います。世間と教会が関心を寄せるチャレンジングな企画をつくっていただけると良いと思っています。

石田　本日はどうもありがとうございました。

聖書普及活動125年記念式典　東京カテドラル聖マリア大聖堂。式辞を述べる大宮理事長（当時）

聖書普及活動125年
記念レセプションでのご夫妻
（2000年10月）

聖書協会世界連盟
マクドナルド総主事と

特集

SOWER 30年の歩み

創刊当時の時代背景

ソア（＝種まく人）創刊は一九九二（平成四）年のちょうど今から三〇年前となる。一九九二年三月に『聖書　新共同訳』が発行以来、四年半で百万冊頒布を達成し、全国各地の百貨店を会場に聖書展が次々と開催されるなど、日本聖書協会の周辺は活気に満ちていた。

世界では、米ソ冷戦終結に伴う一九八九（平成元）年のベルリンの壁崩壊、一九九一年のソビエト連邦解体で大きな民主化のうねりが生じていた。聖書協会世界連盟では、一九九〇年以来「東欧・ソ連へ聖書を贈る」特別募金を推進している。日本でも九千万円という目標を掲げ推進していた。旧共産圏の自由と変革への期待が感じられる時代でもあった。

聖書協会ニュースからソアへ

さらに二〇数年を遡る一九六九年から、A四判四頁二色刷りのニュースレター「日本聖書協会ニュース」が年四回発行されており、これがソアの前身である。二三年にわたり発行が続いた日本聖書協会ニュースだが、「いつもアピールばかりで、面白くない。もっと読み物を充実させてほしい」という声が寄せられていた。そこで、内容も体裁もスマートに、維持会員、後援会員など主たる読者の方々に喜ばれる「聖書情報誌」にしようと、当時の広報・募金部を中心とする七名でのソア編集委員会を構成し、一年かけて大幅なイメージチェンジが図られることとなった。

日本聖書協会ニュース№75
（1992年4月・終刊号）

創刊号の体裁と内容・初期の特集

そうして、ソア創刊号はB五判二〇頁、フルカラーの冊子へと、従来の「日本聖書協会ニュース」を全面的に刷新して登場した。判型こそ二〇二〇年、四八号よりA四判へと拡大されたが、現在までロゴデザインも含め基本的形態は変わっていない。

表紙には、「種をまく人」をモチーフとした本田年一氏によるやわらかな色彩とタッチのイラストが採用され、一四号まで続けられた。

創刊号の特集は「聖書　写本からニューメディア・バイブルまで」として、数千年間における聖書のメディアの変遷について、専門家を招いた座談会がもたれた。ここで話題にされたのは、書き写して伝えられた「写本」、聖書を飛躍的に普及させた「グーテンベルク」、そして「ニューメディア」の三点である。ニューメディアとは、コンパクト・ディスク（音楽CD、CD-ROM）や、「絵の出るレコード」をうたったレーザー・ディスク（LD）、電子出版（電子ブック）などを指していた。

一九九二年、日本聖書協会は「世界初　聖書のCD」として、新共同訳の録音聖書新約聖書全巻を完成させており、後ろ表紙全面に章数字、小見出しごとに頭出しができる音楽CDの利便性を強調し、広告を掲載している。カセットテープ版も同時発売されたが、「検索性」向上を狙ってデジタルへ転換を進めようとする時

SOWER　創刊号
（1992年11月）

創刊号の特集誌面

代の意識が強く感じられる。

ソアは創刊以来、二〇一二年までは毎年二回発行が続き、それ以降年一回の発行となった。

九〇年代前後半にかけての初期においては、六号「戦後五〇年―戦争と聖書」、七号「躍動する中国」、八号「聖書と沖縄―ベッテルハイム来沖一五〇年」（九六年）とそれぞれの時代を反映する特集もあった。

二〇〇〇年と二一世紀に向けて

一九九九年の一五号から、表紙は世界の人々の暮らしを描いた月本佳代美さんによる具象的なイラストへと、大胆なイメージチェンジが図られた。

キリスト降誕二〇〇〇年の節目を目前に発行された一四、一五号はともに「聖書を通読する」をテーマとした特集を組んだ。日々聖書を読み、聖書に触れることは、聖書協会設立以来の普遍的なテーマであり、当時、二〇〇〇年を特別な機会と捉えて聖書通読運動を展開していた。

二〇〇〇年は東京オペラシティで、「キリスト降誕二〇〇〇年　東京大聖書展」が一一月に一八日間開催され、死海写本がアジアで初公開された。日本聖書協会の歴史においても、一八七五（明治八）年の北英国聖書会社の支社設置に始まる、国内聖書事業開始一二五周年であり、一〇月に記念式典が営まれた。ソアもこの一〇月に唯一特別号として「東京大聖書展」特集の一七号を発行した。

二一世紀最初の一八号では「日本聖書協会一二五年のあゆみ」を特集した。新しい世紀の幕開けとともに改めて聖書普及を目指そうと呼びかけた。その後、二三号『アートバイブル』、二六号『パノラマバイブル』といった、聖書の本文テキスト以外に価値を付加した製品にまつわる話題が増えていく。

表紙イラスト二度目の変更

二〇〇六年、二七号に表紙イラストは二度目の変更を受けた。佐藤百合子さんによる日本の街角シリーズで、少し遠めの位置から風景を眺めている構図には、毎回聖書を持っている人物が描きこまれている。まずは銀座四丁目交差点、続いて神戸（二八号）、横浜（二九号）という、聖書協会と歴史的に関係の深い土地、続いて全国のキリスト教学校、教会などの特徴的な建築物というようにテーマを変えつつ、これまでに二四回続いている。

国際聖書フォーラムから新翻訳へ

二〇〇六年以降から三度にわたり開催された「国際聖書フォーラム」は、聖書翻訳を中心に学びを深める場として内外の講師を広く招いて行われた。それを契機として、『聖書　新共同訳』以来の新翻訳プロジェクトが決定し、二〇〇九年から一〇年間にわたる事業が開始される。それに伴って、ソアも四一号（二〇一四年）では「新翻訳事業―標準（Standard）となる日本語聖書を求めて」を皮切りに、新しい翻訳事業の方針やプロセス、従来訳との違いに焦点を当てた記事が増えていく。

二〇一八年『聖書　聖書協会共同訳』が三一年ぶりの新翻訳として完成する。その前後となる四五、四六号では、数々の新しい訳語、訳文の具体例が紹介されている。

聖書協会一五〇年に向けて

以上、創刊号以来のあゆみの概略を紹介した。創刊号から最新号まで、バックナンバーはインターネット上（https://www.bible.or.jp/soc/soc07.html）にPDFが公開され、すべて読むことができる。興味を持たれた号をお読みいただきたい。

二〇二五年は、聖書協会は、日本国内の事業開始以来一五〇年の記念の年を迎える。日本聖書協会が取り組まねばならない将来の課題とともに、読者が聖書に親しむ機会を得られる記事を、これからも紹介していきたい。

14号（1999年6月）

15号（1999年11月）

17号（2000年10月）

27号（2006年2月）

28号（2006年8月）
29号（2007年2月）

41号（2014年3月）

45号（2018年3月）
46号（2019年4月）

横山 匡

1937年高知県生まれ。1984年に１年間イスラエルに滞在し写真撮影に専念。1992年フリーカメラマンとして独立。聖書の舞台を中心に世界各地で取材活動を展開。著書に『イスラエルに見る聖書の世界』旧約編、新約編、『トルコ・ギリシア聖書の世界』使徒行伝編、『イスラエル花景色』（ミルトス）など多数。ソア創刊号以来「新・聖書の世界」を連載。

長年にわたりソアの連載を続けておられる写真家の横山匡氏、宗教史学者の鈴木範久氏のお二人にお話を伺った。

――カメラに興味を持ったきっかけを教えていただけますか。

横山 高校生のときに叔父からカメラを買ってもらったことがきっかけで写真に興味を持ち、美術部から写真部に転向しました。暗室で写真ばっかり焼いていましたね。

――いつ頃キリスト教に触れられたのでしょうか。

横山 一四歳のときです。吉井純男先生の集会に私たち兄弟全員が導かれました。両親が離婚する一年前の本当に危ないときでした。そこで聖書を読むようになりました。吉井先生はずっと励ましてくださったのですが、結核のため二七歳で召されました。その頃から、キリストの信仰に本当の意味で目覚めたという感じがするのです。手島郁郎という無教会の先生を頼って熊本に出て、熊本聖書塾に入塾し、クリーニング屋で勤め始めました。二、三年した頃に自分で勝手に写真を入れた社内報を出し始め、それが公式に認められ、本格的に写真を覚えたのです。それから、病気をしたときに「自分は本気で何をやりたいのか」と自分に問いかけ、「よし、写真の道に進もう」と心に決めました。写真屋で修行をしたのちに開業しました。

――そしてイスラエルへ行かれる機会を得られたのですね。

横山 開業して二年目に、全国の信徒を連れて聖地巡礼に行く際にカメラマンとして呼ばれ、初めてイスラエルに行きました。今まで聖書を神話の世界ぐらいにしか思わずに読んできたものですから、聖書の世界が現実にあるのだということに大変衝撃を受けました。松林の中にシクラメンがぎっしり咲いている。これを見たときあまりの感動に泣いてしまいました。嘆きの壁で祈っているときに、「お前はここで生まれた」という神様の声を聞くのです。生まれたばかりの赤ちゃんのように、感動して泣きに泣いて、イスラエルに一年間住みたい、聖書の世界を映像にしたいという思いが湧きました。理髪師の妻が私の留守を支えてくれました。

――イスラエル滞在のお話を教えてください。

横山 ヘブライ大学に通う日本人留学生の寮で寝泊まりをさせてもらいながら一年間撮り続けました。そのフィルムが、いまだに私の財産なのです。帰国する一か月前に、『題名のない音楽会』のプロデューサーの牛山剛さんという人が聖書の世界を映像にしたいと言っているから、ちょうどイスラエルで撮っている私にカメラをやらせようという話が舞い込んできました。それから「聖書の世界」のビデオ撮影が続きます。私の願いを起こさせ、実現に至らせるのは神であるという、聖書に書いてある通りのことが起こりました。

――聖地を撮る魅力は何だと思われますか。

横山 その地名を探していって、遺跡を撮るというのが最初の動機でしたが、聖書には、いろんな動植物が登場するし、イスラエルでのお祭りは、ほとんど聖書の出来事です、聖書の舞台というのは、とても多岐にわたっているのです。キリストが「野の花を見よ」と示された花がどれか特定する必要もないぐらいに、イスラエルに咲いている花がこんなにも美しい。春にはガリラヤ湖畔はアネモネの花が一面に咲き誇ります。本当に素晴らしいと思います。

――ありがとうございました。

鈴木範久

1935年生まれ。立教大学名誉教授。専攻は宗教学・宗教史学。著書に『明治宗教思潮の研究』（東京大学出版会）、『内村鑑三』（岩波新書）、『内村鑑三日録』（全12巻）『日本キリスト教史物語』『近代日本のバイブル』『日本キリスト教史』（いずれも教文館）、『聖書の日本語』（岩波書店）、『聖書を読んだ30人』（日本聖書協会）など多数。

――　鈴木先生にはソアで、一九九九年から二一年間に三五回「人物と聖書」の連載をお続けいただいています。連載のきっかけを教えていただけますか。

鈴木　立教大学で聖書展を一九九九年に開催したことがありました。それで作家や社会事業家、学校とか、幅広いところから聖書を集めて展示しました。聖書図書館に出入りしていた時期でもありましたし、そんなところから話が持ち上がったのではないかと思います。

――　第一回は夏目漱石でした。漱石と聖書の接点はあまり一般の人には聞きなじみがないですから、インパクトがあったと思います。

鈴木　学生から質問があったのです。『三四郎』で美禰子がふと呟く「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」というあの詩篇五一篇の言葉はどの聖書から取ったのかという。私も聖書を調べてみたが、見つからない。漱石の所有した聖書など多少調べたけれど、それでも合わないし、当時の日本の聖書ともぴったりしない。漱石の目録か何かに聖公会の祈祷書があったのかな、それで聖公会の祈祷書を調べたら、それと言葉がぴったりなのです。漱石は熊本の高校教師時代、聖公会のミショナリーと付き合いがあったわけですね。聖公会の祈祷書もその頃に手に入れたのではないかと。それを見たら、本当に漱石の言葉と一字も違わずぴったりしたのです。

――　山本五十六や倉田百三、中勘助など、意外な人物を取り上げてくださっています。

鈴木　山本五十六は、新潟の長岡に記念館ができて、その記念館の発起人が私の昔の友達だったのです。それで聖書があるようなことを聞いたものですから。

――　なるほど、そういう情報を耳にされたのですね。

鈴木　それですぐに見に行って、そしたら山本五十六っていうのは、子どもの頃から日曜学校に通っていたと。キリスト教とは非常に縁が深くて、海軍兵学校の頃にも、同期の学生と同じ部屋にいると、なんでお前は聖書ばかり読んでいるのかと聞かれるぐらい聖書を読んでいたらしいのですよ。

――　そのように情報が入って来ると、その都度実際に足を運ばれるのですね。

鈴木　例えば、石坂洋次郎のときには秋田の横手に行きました。石坂の小説は他にも、ソアで書いた以外にもたくさん聖書の言葉が出てくるし。吉野作造のときは仙台のちょっと向こうの大崎まで行きました。館長がとっても気持ち良く接してくれたりしてね。

――　いろいろと訪ねて行かれることがお好きなのですね。

鈴木　地方へ行くと意外な発見をしたりしますね。西田幾多郎は、けっこう聖書を読んでいたとか。西田は能登半島でした。ただ、残されているのは、ギリシア語や英文の聖書しかなくて、日本語の聖書が本当は見つけたかったのだけど。あの頃の時代の人というのは、西田幾多郎にしても鈴木大拙にしても、日本のことも深ければ、聖書やキリストのことも深い。そういう人が多い。私の執筆の目的は、聖書というのは、思った以上に多くの人たちが読んでいるということを知ることですね。

――　この先もぜひ執筆を続けていただきたいです。

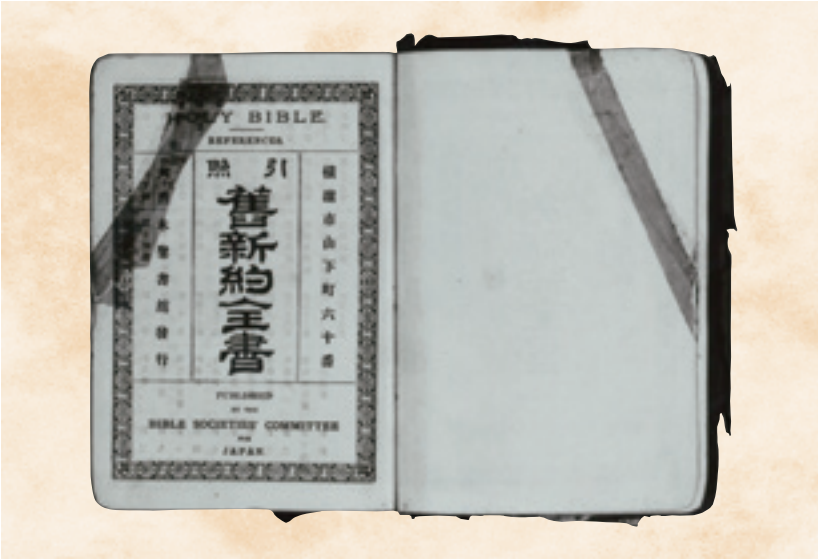
鈴木　いつもこれが最後だと思っています。どこでどういう聖書に出会うかわからないですから。

――　ありがとうございました。

『耶蘇』を著した武者小路実篤
武者小路実篤と聖書

鈴木範久 すずき のりひさ 立教大学名誉教授

志賀直哉から贈られた聖書　調布市武者小路実篤記念館所蔵



武者小路実篤訪問記

今から五八年前、府中にある私邸に武者小路実篤を訪ねた。当時、実篤は八〇歳近く、私は二〇代最後の年だった。訪問希望の手紙に対し武者小路からは「僕のいるとき来て下さればいつでもお逢いします」との返事をもらっていた。

武者小路の私邸は、まるで公園のように広かった。鬱蒼とした木立の底の方に住宅が設けられていた。すでに先客がいたため、しばらく座って順番を待った。武者小路は、目の前の籠に置かれた野菜を写生しながら応答していた。先客は画家らしく、当時展覧会が開催されていたムンクの絵について尋ねた。「ああいう絵は嫌いだね」と武者小路は言下に答えた。

志賀直哉から贈られた聖書

武者小路は少年時代に聖書に接している。叔父（母の弟）の勘解小路資承（かでのこうじすけつぐ）の家であった。しかし、キリスト教の影響は、学習院時代からの友人で文学仲間の志賀直哉の影響が大きい。志賀は一九〇一年ころから内村鑑三の聖書研究会に出席していた。聖書研究会の草創期で、会員はまだ二十数人の時代である。その志賀の影響で武者小路は内村の発行する雑誌『聖書之研究』を毎号購読していた。特に巻頭の内村による短文を愛読したという。一九〇五年に、志賀とともに海老名弾正の本郷教会で開催された内村の講演を聴き感激している。

その志賀からは聖書も贈られていた。一九〇〇年に大日本聖書館から刊行された

『引照　旧新約全書』である。その表紙裏には志賀により Naoya Shiga 1901.6' の署名が書き込まれている。

著書『耶蘇』

武者小路は、一九二〇（大正九）年、新しき村出版部から作品『耶蘇』を出版した。序文で次のように記している。

自分は耶蘇を信じるよりも耶蘇の神を信じるものだ。自分はこゝに耶蘇のことをかくのは実にその神のことをかきたいからだ。自分の力は足りない。神よ、助け玉へ。

もちろん前述の志賀直哉から譲られた聖書を参考にしているが、ときおり左近義弼の訳を引き「左近氏の訳によると」記している。左近の『マタイの伝へし福音書』（博文館、一九〇七）であろう。

武者小路は最後に言う。

耶蘇を自分は神とは思つてゐない。いざと云ふ時神と合一した人だと思ふ。

ここには武者小路のキリスト理解がよく反映されている。

新しき村

武者小路の新しき村は、一九一八年に宮崎県に設けられた。しかし、やがて同地に発電所が設けられたことにより、埼玉県毛呂山に東の村が設けられた。武者小路は、小冊子『新しき村叢書』のなかの「新しき村の信仰」（一九二〇）で、「新しき村」の生活は、つまるところ「神の国とその義（ただ）しさを求める仕事である」と言っている。

筆者は一時、東の村と同じ土地に住んでいて、同地には何度も訪れ、村民とも話した。その帰途、村内にある「大安殿」と称される建物（寺社でも教会でもない）を仰いで、なんとなく武者小路の信仰にふれたような気がした。

耶蘇　1920年刊

新しき村叢書　新しき村の信仰　1920年刊

エッセー 46

「聞け、イスラエルよ、主の声を聞け」

メンデルスゾーン作曲《エリヤ》の歌詞とその聖書出典

星野宏美

＊星野宏美著『メンデルスゾーンの宗教音楽――バッハ復活からオラトリオ《パウロ》と《エリヤ》へ』（教文館、2022年）

ドイツ・ロマン派を代表する作曲家フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ（一八〇九～四七）は、ホ短調のヴァイオリン協奏曲や、交響曲《スコットランド》と《イタリア》、《結婚行進曲》などの名曲を通して私たちに親しい存在である。しかしその一方で、彼が生涯を通して熱心に宗教音楽に取り組んだことは、日本ではあまり知られていない。

メンデルスゾーンはユダヤの家系に生まれたが、当時のドイツ社会により良く同化しようとする両親の判断により、キリスト教徒と同じように育てられ、七歳の時にプロテスタントの洗礼を受けた。三八年の短い生涯において彼が手掛けた作品は約七五〇曲。そのうち九〇曲が宗教曲である。いずれも珠玉の作品だが、代表作をひとつ挙げるのなら、晩年のオラトリオ《エリヤ》になろう。旧約聖書の預言者エリヤを題材とし、独唱と合唱、オーケストラのために作曲した大作である。二部（全四四曲）からなり、演奏時間は二時間を優に越える。

メンデルスゾーンは作曲だけでなく、台本も自ら手掛けた。その際、友人の牧師に助言を求めつつ、聖書の言葉を継ぎ合わせて歌詞としたのが特徴である。彼は《エリヤ》に「旧約聖書の言葉に基づくオラトリオ」という副題を与えた。実際には、聖句をそのまま引用した曲、聖句に多かれ少なかれ手を入れた曲の両方がある。

対照的な例を二曲、挙げよう。まずは作品冒頭である。「イスラエルの神、主はまことに生きておられる」という預言者エリヤの力強いバス独唱によって、このオラトリオは始まる。原語はもちろんドイツ語であり、ここでは私の日本語訳を挙げているが、これはルター訳ドイツ語聖書の列王記上一七章一節と完全に一致する。

一方、第二部冒頭では、ソプラノ独唱が美しい旋律にのって次のように歌う。「聞け、イスラエルよ、主の声を聞け。ああ、汝、彼の戒めを心に留める者よ。」この歌詞に完全に一致する聖書の箇所はない。しかし、「聖書の言葉に基づく」とメンデルスゾーン自身が明記しているからには、出典があるはずだ。

従来の研究では、イザヤ書四八章「ヤコブの家よ、このことを聞け」（一節）、「私の戒めに耳を傾けさえすれば」（一八節）が出典ではないかと言われてきた。そうだとすると、ずいぶん自由な改変である。類似は表面的にも思われる。それに対して、近年、申命記六章四節、すなわち「聞け、イスラエルよ」が出典であろうという新説が出された。この聖句には、「私たちの神、主は唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい」（四、五節）と神の戒めが続く。これもまた自由な改変だが、内容的により深い繋がりを感じさせる。

メンデルスゾーン自身は歌詞の出典についてヒントを残していないので、推論となるが、この新説に私が心底、納得したのは、小著＊の執筆中だった。詳しくは、小著終章を読んでいただきたいが、メンデルスゾーンのオラトリオ《エリヤ》は、作曲より数十年前に書かれた父の手紙への返答だと気付いたからである。父の手紙は直接にはメンデルスゾーンの姉ファニーにあてたものだが、ユダヤ教徒の父がキリスト教徒の子供たちに対して、こう綴る。「宗教が何であろうと、唯一の神、唯一の徳、唯一の真理、唯一の幸福が存在する。お前は、お前の心の声に聞き従えば、すべてを見いだすだろう。」

「主の声を聞け」という歌詞は、「心の声に聞き従え」という父の教えと重なって響いてくる。両者の背景にある「神は唯一」という戒めをメンデルスゾーンが《エリヤ》第二部冒頭で言語化しなかったのは、ユダヤ出自のキリスト教徒という自らの複雑な宗教背景を意識してのことかもしれない。音楽的魅力に溢れるだけでなく、社会史的にも興味深いメンデルスゾーンの宗教音楽がより一層、広く聴かれることを願う。

星野宏美（ほしの・ひろみ）
立教大学異文化コミュニケーション学部
教授

聖書が語る イエスの死の意味

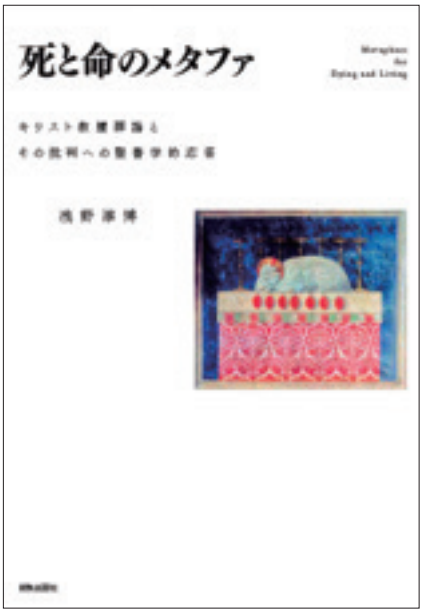
浅野淳博
あさの　あつひろ
関西学院大学教授

本著『死と命のメタファ　キリスト教贖罪論とその批判への聖書学的応答』は、副題のとおり、キリスト教贖罪論とその批判に対して聖書テクストからいかに応答すべきかを明示している。キリスト教贖罪論への批判は、たとえば高橋哲哉著『犠牲のシステム　福島・沖縄』に見られ、この教義を究極的に犠牲者へ責任を転嫁するスケープゴート的な思想として批判する。じつにこれは一七五五年のリスボン大震災において教会側が提唱した弁神論的な天罰説、あるいは最善説を批判したボルテールやカントらの主張を繰り返している。したがって本著は〈イエスの死がもたらした救いは責任転嫁の思想か〉という問いに一貫して〈否〉と答えている。さらに〈イエスが神殿犠牲に代わる〉という誇張した贖罪表現が聖書テクスト全体の思想を反映していない点を指摘する。その上で現代の教会がイエスの死をいかに理解すべきか、その方向性を示している。

本著はまず、イザヤ書五三章の第四の僕の生き様に対して「贖いのいけにえ」（一〇節）というメタファが用いられることに注目する。犠牲には本来〈人の違反の責任を動物が引き受ける〉という移行主題と、その結果〈人が神と隣人への誠実さを回復する〉という啓発主題が見られる。僕が犠牲のようだとは、彼の生き様（と死に様）が他者の罪を引き受ける（移行主題）からでなく、他者を敬神へと促す（啓発主題）からだ。つまり第四の僕の死は他者に責任転嫁でなく責任の自覚を促す。この犠牲メタファの理解は、イエスの死の理解を方向づける。

イエスは自らの死を「多くの人のため」（マコ一〇・四五）と説明する。神殿犠牲を連想させがちな「～のために死ぬ」という表現は、イエスが他者の代理となることを意味せず、イエスが他者に奉仕することを意味する。つまりイエスの死は神の国運動という奉仕の生き様の結果である。この奉仕の末の死は、イエスの弟子を含む他者を神の国の到来に備えるために敬神へと促したのであり、他者の敬神を代理として引き受けたことを意味しない。つまりイエスの死は他者に責任転嫁でなく責任の自覚を促した。

原始教会はこの理解を継承し、「私たちのため／あなた方のため」という表現でイエスの死の責任を内面化した。イエスの死が「兄弟姉妹のため」であることを根拠に、教会は確信の異なる信徒を受容する責任を負った（ロマ一四・一五、一コリ八・一一）。イエスの死が「すべての人のため」であることを根拠に、和解の務めに従事する責任



『死と命のメタファ　キリスト教贖罪論と
その批判への聖書学的応答』
浅野淳博
新教出版社　2022年

リスボン大震災（1755年）

を負った（二コリ五・一四～一五）。つまり教会にとって、イエスの死が「～のため」であるとは責任の転嫁でなく、いつも責任の自覚を意味する。つまり原始教会がイエスの死を説明するために神殿犠牲を用いる場合、イエスの死と犠牲とを結ぶのは犠牲に見られる啓発主題であって移行主題ではない。

さらに使徒パウロは、救済論的教えに紙面を割くわりに神殿犠牲にほとんど言及しない。例外的にロマ三・二五と一コリ五・七のみが犠牲メタファを用いる。しかしその場合も、〈イエスが神殿犠牲に取って替わった〉とか〈イエスの死はまさに犠牲だ〉という代替的で直接的な表現でない。パウロがイエスの死を犠牲メタファによって説明する場合の意味合いは以下のとおりだ。〈死にまで至ったイエスの運動を通して多くの人が神の国に参与することになったが、それはある意味で旧約聖書において神殿犠牲がイスラエルの民を神へと立ち返らせたことのようでもある〉。

このようなイエスと神殿犠牲との関係性は、ヘブライ書において変化を見せる。ヘブライ書では「第二のもの（大祭司キリストの勤め）を立てるために［神が］最初のもの（神殿犠牲）を廃止される」（ヘブ一〇・九）という代替主義が顕著となる。この時点で神殿犠牲は、単なるメタファではなくなる。犠牲メタファは実体を得、実体化したからこそキリストの死に取って替わられる。こうしてキリストの死は真の神殿犠牲となった。このようなイエスの死に関する理解は、使徒教父の『バルナバ書簡』をも経由して教会に定着した。

教会はキリスト教贖罪論への批判に対していかに応答すべきか。まず〈イエスの死が真のいけにえである〉という理解が新約聖書全体の思想でないことを確認すべきだろう。さらに、イエスの死に関する教えが一般に責任転嫁でなく責任の自覚を促していることを留意すべきである。その上で教会は、現代社会にとって説得性の高い仕方でイエスの死の意義を伝えるための新たなメタファを模索すべきだろう。

本稿は、二〇二二年七月に日本聖書協会YouTubeチャンネルで公開した、リモートインタビューシリーズ「聖書のツボ　新約学から贖罪論を考える」に基づき浅野淳博氏のご著書につき要約いただいたものです。併せて動画もご視聴ください。

日本聖書協会YouTubeチャンネル
https://www.youtube.com/c/JapanBibleSociety

コンテスト　日本聖書協会×キリスト新聞社　第1回聖書エッセイコンテスト

あの「聖書ラノベ新人賞」とのコラボ企画！

募集テーマ　「わたしのバイブル」「わたしとバイブル」
選評　林あまり & 清涼院流水
募集期間　2022年8月15日（月）～ 12月31日（土）必着

聖書を愛読する一般の読者（信者以外を含む）とともに、キリスト教に親しみを覚えられるような新しい作品の発掘を目的に、「わたしのバイブル」「わたしとバイブル」をテーマに、ご自身の聖書とのかかわりを綴ったオリジナルの随筆を募集します。
なお、今回は2017年、2018年に続き、聖書・教会・キリスト教を題材にしたライトノベル作品を募集する「聖書ラノベ新人賞」第３回との同時開催となります。

募集内容
「わたしのバイブル」「わたしとバイブル」をテーマに、ご自身の聖書とのかかわりを綴ったオリジナルの随筆。
1,000～1,200字。自作未発表の作品。
※複数ご応募いただけますが、入賞の対象となるのは１人１作品です。

応募方法
応募方法は2通りあります。
下記のどちらかの方法でご応募ください。
①投稿サイト「NOVEL DAYS」上で作品を公開し、「聖書エッセイ1」のタグを付ける。
②日本聖書協会の投稿フォームから送信
詳細はこちら
https://www.bible.or.jp/bibleessaycontest.html

イベント　三浦綾子生誕100周年記念!!　プレミア試写会

皆様のご支援で、デジタル HDリマスター化完成 !!
よみがえる《神の愛》!!　美しい画面になって感動倍増 !!

三浦綾子原作 映画「塩狩峠」「海嶺」プレミア試写会

日時・上演　2022年11月25日（金）
①14：00～ 15：55 塩狩峠
②16：00～ 17：50 海嶺
③19：00～ 20：55 塩狩峠

会場　中野ZERO小ホール
〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9-7
中野（東京都）駅南口から徒歩約7分
新中野駅4出口から徒歩約11分
★入場無料（自由献金あり）
★①②…日本語バリアフリー字幕版を上映予定

主催　ライフクリエイション（いのちのことば社）

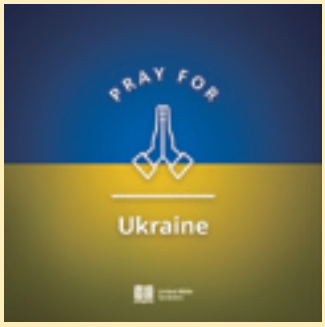
協力　三浦綾子文学記念館、三浦綾子読書会、日本聖書協会、クリスチャン映画を成功させる会

各回
先着ペア
250組 500名様
ご招待!!

詳細・お申込み
https://forms.gle/pNKZuPwPu4VY4RZL6

ウクライナ聖書支援募金

日本からの祈りと連帯の徴として、3月4日より、「ウクライナ聖書支援募金」の受付を行っています。お寄せいただくご献金はすべて、ウクライナ聖書協会と、ウクライナを支援する周辺地域の聖書協会の活動のために使われます。
ウクライナ聖書協会の活動は「日本聖書協会 募金部」Twitter、Facebookでご紹介しています。



皆様の
お祈りとご支援を
お願い
いたします。

国境でウクライナ難民を
支援するモルドバ聖書協会の
ボランティア

避難民に配る聖書を運ぶ、
ウクライナ聖書協会のスタッフ

Facebook
https://www.facebook.com/japanbiblesociety/

Twitter
https://twitter.com/jbsfund

キーウ州ボヤルカの教会にて。
避難民への聖書配布

ご献金の方法

郵便振替：00160-2-18410
口座名：（一財）日本聖書協会 ／ ゆうちょ銀行〇一九支店
（当座）0018410
（通信欄に「ウクライナ支援」と明記してください）
銀行振込：三井住友銀行 京橋支店（普通）6552744
口座名：（一財）日本聖書協会
（送金者のお名前の前に「ウクライナ」と付けてください）

詳しくはこちら

https://www.bible.or.jp/collection/ukraine.html

コンビニ振込やクレジットカードでのご送金もお受けしています。特設ウェブページの「**コンビニ振込で献金する**」からお申し込みいただければ、専用振込用紙をお送りします。クレジットカードも「**クレジットカードで献金する**」からお申し込みください。

神戸バイブル・ハウス出版『聖書翻訳の歴史』

池田 憲廣 著
神戸バイブル・ハウス展示委員会　発行
A5判、268頁

- 旧約聖書形式の新約聖書の形成
- 印刷技術のない時代にそれらが伝承された聖書BHS、LXX、ウルガタ…の紹介
- 英語訳　ドイツ語訳　フランス語訳　中国語訳
- 和訳はキリシタン時代から明治、大正、昭和…本書200ページのうち100ページをあてて詳述
- 現在諸教会で用いられている口語訳、新共同訳、新改訳などの翻訳原則も解説

定価880円（税込）＋送料370円
ご注文はこちら　https://kbh-bible.jp/commentary_hobt

ソア50号発行によせて

総主事 具志堅 聖
General Secretary
Gushiken Kiyoshi

2022年8月、約2年ぶりにアメリカを訪れ、Christian Product Expo 2022（CPE）と呼ばれる、米国におけるキリスト教商品の大規模展示会に参加しました。新型コロナウイルス感染症の収束が依然として見通せない状況の中、招待を受けた当初は海外渡航を躊躇しましたが、神の守りを信じて出かけました。ケンタッキー州レキシントン市の展示場には総数約1,000人以上の来場者がありました。各セッションは満席、そしてマスク無しでの礼拝・講演会・会食が行われました。大小合わせると100を超えるブースがありました。ここ２年半ほどのコロナ禍で見たことのない光景に、戸惑いつつも喜びを感じました。

ある一つのセッションで、講師の一人がこう述べました。「私たち出版業界の働きはとても地味なものであり、地道な積み重ねです。けれども覚えてほしい。古今東西、文書伝道は福音宣教に欠かすことのできないものなのです。それを誇りにこれからも励んでいきましょう」と。聖書のことば、すなわち神の良き知らせ（福音）は、語る言葉と書く言葉を通して、語り継がれ・受け継がれてきたのです。私たち聖書協会の働きも、その延長線上にあることを再認識させられました。

CPEの会場のようす

このソアも1992年に創刊し、今回で50号を数えます。これまで3名の総主事のもと、20名以上のスタッフがこの機関誌に携わってきました。ソアに寄稿してくださった方々を一覧にすると、錚々たる顔ぶれに目がとまります。多くの方々が聖書を愛してこられたこと。聖書普及事業のために多くの先達の方々が協力してくださったこと。さまざまな賜物を持った方々がこの宣教の業に参与してくださったこと。それらのことを覚えます。多くの協力者があって、50号発行を迎えることができたと思うと、感謝の思いでいっぱいです。

遣わされないで、どうして宣べ伝えることができるでしょう。

「なんと美しいことか、良い知らせを伝える者の足は」と書いてあるとおりです。

…それゆえ、信仰は聞くことから、聞くことはキリストの言葉によって起こるのです。

（ローマ10：15、17）

これからもソアの発行を続けていきますが、本誌を通して、多くの方々が聖書に関心や親しみを持ってくださることを願います。さらにそこから福音に触れ、キリストに出会う出来事が起きていくことを祈っています。

編集後記

節目となる五〇号に至りました。種から育て、花を咲かせ、実を実らせるのは、良い土地であると主イエスは福音書のたとえから教えています。「私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です」（Ⅰコリ三・六）というパウロの言葉も思い浮かびます。植えた人、世話した人を遥かに超えて、神が働いてくださったことを感謝いたします。今ひとたび原点に立ち返り、このソアという器を通して、聖書普及の働きを次世代につないでいきたいと願います。

ご感想、ご意見を広報部までお寄せください。ささやかな記念品をお送りいたします。

104-0061
東京都中央区銀座4-5-1
日本聖書協会広報部
info2@bible.or.jp

FSC www.fsc.org ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C020167
この印刷物はFSC® 認証紙を使用しています。

新・歴史接写 1

聖書頒布の時を刻んだ木箱

箱と鞄を自転車に乗せたコルポーター（1960年頃）。後ろの建物は当時あった日本聖書協会 関西支社（現 大阪市北区新地）。1961年に建て替えられる前の古い社屋。

聖書を箱に詰めるコルポーター（1960年頃）。1961年以前の関西支社の古い社屋で撮影したものか。

2020年12月、日本基督教団枚岡（ひらおか）教会（東大阪市）で倉庫を整理していたところ、「日本聖書協會」と書かれた木製の箱が見つかった、と信徒の方から連絡があった。寄贈いただいた木箱は、幅47cm×奥行26.7cm×高さ20.5cmで、蓋には、「みことばの箱」とあり、次のような賛美歌らしき文言が書かれていた。

ひろくこの世を　てらせよとて
主よりわれらは　あたへられぬ
これやかがやく　こがねのはこ
まことのたまは　うちにみてり

調べたところ、1931年版『讃美歌』（讃美歌委員会）の165番2節と同じであることがわかった。

この箱は何に用いられたのであろうか。スケール的には聖書が何冊も十分に入る大きさである。そこで、この箱は恐らく、かつてコルポーター（聖書普及員）が聖書を入れて頒布に使ったものでないかと推測し、日本聖書協会にある過去の写真にその手がかりを探した。

すると、造りは異なるが、賛美歌の書かれた箱の写った写真が見つかった。写真では、コルポーターが聖書を箱に詰めているが、この箱の賛美歌は、1954年版『讃美歌』（日本基督教団讃美歌委員会）190番2節で、木箱のそれとは歌詞が異なっている。また恐らく同じ頃の写真には、同じ造りと思われる箱を自転車に載せたコルポーターが写っている。後代の写真からの推測になるが、木箱の用途は、コルポーターが聖書を詰めて運ぶためのものだったと考えてよいだろう。また木箱は、歌詞が変わる1954年版『讃美歌』の発行以前に作られたと考えるのが妥当である。

明治後期以降、日本聖書協会の前身スコットランド、イギリス、アメリカ各聖書会社（支社）にはコルポーターがいて、聖書普及に努めていた。戦時中に一時中断するも戦後に再開、1953年頃からは専任のコルポーターが計画的に全国各地に派遣され、自転車や徒歩で聖書を頒布して回った（1969年普及員制度は終了）。木箱は恐らく関西支社で使用していたものが、役目を終えて枚岡教会にもたらされたのであろう。古い木箱からは、各地を訪ね歩いたコルポーターの汗と涙が伝わってくるようである。

（日本聖書協会編集部　飯島克彦）

SOWER ソア No. 50
2022年11月1日発行
【年1・2回発行】
発行・一般財団法人 日本聖書協会
〒104-0061 東京都中央区銀座四丁目5-1 聖書館ビル
電話 03-3567-1988 FAX 03-3567-4451 振替 00160-2-18410

聖書

聖書協会共同訳

The Pulpit BIBLE

変わらない言葉を 変わりゆく世界に

読みやすくなった引照・注付き大型判が
ラインアップに加わりました。

引照・注付き

■ 聖書 聖書協会共同訳
引照・注付き 大型 SIO53
旧約＋新約
¥8,580（本体 ¥7,800）
ISBN：978-4-8202-1358-1

■ 聖書 聖書協会共同訳
旧約聖書続編付き 引照・注付き
大型 SIO53DC
旧約＋新約＋旧約続編
¥9,790（本体 ¥8,900）
ISBN：978-4-8202-1359-8

- 大型（A5判）
- 本文文字の大きさ 約8.5ポイント
- クロス装・ハードカバー
- 紙ジャケット掛け

2023年春、講壇用聖書が完成します。2023年1月末まで早期予約受付中です。

礼拝での使用を開始する教会、
教科書を切り替える学校も
着々と増えています。

日本聖書協会
頒布部 distri2@bible.or.jp

＊講壇用聖書の詳しいご案内とカタログ請求はこちらから
https://www.bible.or.jp/online/si_pulpit.html

一般財団法人 日本聖書協会のホームページ
https://www.bible.or.jp/
デザイン＝株式会社 デザインコンビビア
印刷＝株式会社 高速オフセット